

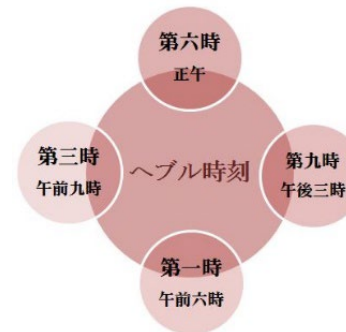
## 十字架につけられたイエシュア (3)

【聖書箇所】 マタイの福音書 27 章 45～46 節

### ベレーシート

●マタイの福音書の特徴は、御子イエシュアにおいて預言が成就したことを、ことさらに強調している点にあります。つまり、「このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが、成就するためであった」(1:22, 2:15, 13:35, 21:4)ということです。聖書の預言は、「預言書」(ネヴィーイーム)だけにあるのではなく、聖書全体が預言書と言えます。創世記 1 章 1 節は聖書全体の表題(タイトル)ですが、実はこの表題も預言なのです。今回取り上げることになる詩篇は多くの預言が含まれています。ちなみに、詩篇の作者の一人であったダビデのことを使徒ペテロは「彼は預言者でした」と述べています(使徒 2:30)。人が知ろうが知るまいが、神である主が預言者たちを通して語られたことが御子イエシュアにおいて必ず成就するという、マタイが強調しようとしたことはその点なのです。

●「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました」(ヘブル 1:2)とあります。その意味は、神が世界の基が据えられたときから隠されているご計画を、御子イエシュアの語ることば(=たとえ)を通して、またすべての行為(わざ)を通して成就し、そして彼を取り巻くすべての状況さえもがあらかじめ語られたことの成就であるということなのです。神のご計画のシナリオは極めて緻密であり、用意周到であり、その知恵と知識は計り知れないほどに奥深いのです。今回は、「三時間にもおよぶ『闇』が全地をおおった」ことと、イエシュアが十字架上で語ったことば「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」一に触れたいと思います。イエシュアが十字架上で語った七つのことばのうちの一つだけをマタイは記しています。今日のテキストは以下の箇所のみです。



【新改訳 2017】 マタイの福音書 27 章 45～46 節

45 さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。

46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

### 1. 闇が全地をおおった

●「十二時から午後三時まで」(ヘブル時刻の「第六時から第九時まで」)の三時間、闇が全地をおおったことが記されています。十字架上の前半の三時間は取り巻く人々によってイエシュアはののしられました。後半の三時間は、神によって闇の中にイエシュアは据え置かれたのです。三時間の「三」という数と「闇」という言葉、そしてそれが「全地をおおった」という出来事。そのあとに、イエシュアの嘆きの極みの叫びが静寂を突き破ります。

**(1) 「三」という数は神の必然的確約数**

●「三」という数字は、神のご計画においてなくてはならない必然的・確約的出来事を意味します。たとえばイエシュアが「三日目によみがえらなければならない」という出来事がそうです。「三」という数が神のご計画の中において必然的な出来事を物語っているのです。今回の「十二時から午後三時まで」と表現された「三時間」の「三」も神のご計画にある必然性を示しています。そこでは「闇が全地をおおった」とありますが、それは**神のわざが現わされるため**なのです。ホセアもそのことを以下のように預言しています(6:1~2)。

- 1 さあ、【主】に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちを打ったが、包んでくださるからだ。
- 2 主は二日の後に私たちを生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださる。私たちは御前に生きる。

**(2) 「闇」と訳された「ホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)が全地をおおった**

●御子イエシュアが十字架にかけられた午前九時から正午までは、イエシュアに対する嘲りとののしりのことばが浴びせられました。ところが、正午になるとあたりが急に真っ暗になり、闇が全地を三時間にわたっておおったのです。これは空が暗くなったということではなく、闇が全地をおおったことを意味しています。

●「闇」という語彙の初出箇所は、創世記 1 章 2 節にある「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり」の「闇」です。「闇」である「ホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)は「光」である「オール」(אֵל)と対立する概念です。創世記の「光」は光源としての光でなく、「神のご計画とみこころ、みむねと目的」を意味します。「生まれつきの盲人」(ヨハネ 9:1)は、まさに「闇」そのものです。しかし、彼がそのように生まれたのは、「**神のわざがこの人に現わされるため**」とイエシュアは言われました。同様に、全地が闇でおおわれたのは、**神のわざが全地に及ぶことを啓示する終末的預言**なのです。それゆえに神がそのようにしたのです。

●イエシュアが「死に向かっている姿」と「闇が全地をおおっている」状況が重なっています。これは「終わりの日」「主の日」における闇の支配を啓示しているのですが、エジプトでその「型」となる出来事が起こっています。

【新改訳 2017】出エジプト記 10 章 22~23 節

- 22 モーセが天に向けて手を伸ばすと、**エジプト全土は三日間、真っ暗闇となった。**
- 23 人々は**三日間**、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。  
**しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。**

●神の民がメシアによって解放される日が来る前に、必ず闇の支配が地を覆うことが起こるということを預言的に啓示しているのです。多くの人々が将来に何らかの希望を持っています。希望がなければ人は生きることができないからです。しかし聖書によれば、これからの時代がますます明るくなるような時代にはなっていないことを教えています。むしろその反対で、特に、キリストの再臨が近くなればなるほど、未曾有の苦難が起こることを聖書は告げています。黄昏を越えて、夕から夜中の闇に向かっていく時代になるからです。ですから、神以外に望みを置いているとすれば、その希望は必ず失望に終わるのです。ところが、かつてエジプトでは、「人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。しかし、イスラエルの子らのすべてには、

## 闇

住んでいる所に光があった」とあるように、未曾有の闇が支配したとしても、神を信じる者たちには失われることのない「希望の光」があるのです。闇の訪れとそこにある希望についての聖書の預言を見てみたいと思います。

### ① 【新改訳 2017】ヨエル書 2 章 1～2 節

1 「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。」

地に住むすべての者は、恐れおののけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。

2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が、暁とともに山々の上に進んで来る。

このようなことは、昔から起こったことがなく、これから後、代々の時代までも再び起こることはない。

### ② 【新改訳 2017】ヨエル書 2 章 31～32 節

31 【主】の大いなる恐るべき日がある前に、太陽は闇に、月は血に変わる。

32 しかし、【主】の御名を呼び求める者はみな救われる。

●以上のことから、イエシュアが十字架にかかっているその日の正午から三時間襲った「暗やみ」—「闇」を意味する「ホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)が全地を覆ったことは、キリストの再臨の前に必ず起こらなければならない必然的かつ確約的な出来事なのです。それが「三」という数に表されているのです。

●マタイはイエシュアが息を引き取られた後に起こった超自然的な出来事を記していますが、これについては、次回で取り上げます。今回は、十字架上でイエシュアが語られた一つのことばに注目してみたいと思います。

## 2. イエシュアの叫び

46 節「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」

アザヴターニー	ラーマー	エーリー	エーリー	
אֶזְבָּחֶיךָ	לָמָּה	אֵלֵי	אֵלֵי	(詩篇 22 篇 1 節 Hebrew 原文)
私を見捨てたのか	どうして(なぜ)	わが神	わが神	

※なぜ 46 節のことばが詩篇 22 篇(原文)と異なっているのかと言えば、ギリシア語をそのまま音訳しているからです。アラム語だからではありません。イエシュアはヘブル語で語っているのです。

●詩篇 22 篇 1 節は「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」に続いて、新改訳 2017 では「私を救わず遠く離れておられるのですか。私のうめきのことばにもかかわらず。」と訳されています。原文は「私の救いから遠く」、「私の叫びのことば」という構文になっています。動詞は一つ「あなたは私を見捨てた」を意味する「アザヴターニー」(אֶזְבָּחֶיךָ)しかないのが、後の名詞の部分の意味が通じるように意識されています。重要なのは「なぜ、どうして」を意味する「ラーマー」(לָמָּה)があることです。このことばがある限り、神に対する信頼の糸は切れてはいないことを物語っています。信頼の糸が切れる時、このことばは出てきません。

## מתי

●とはいえ、ここには神から見捨てられたメシアが示されています。この詩篇 22 篇はメシアの全体像を知る上できわめて重要な詩篇であり、多くの時間をかけて学ぶべき価値のある詩篇と言えます。なぜなら、この詩篇の中に、イエシュアの生涯、そして十字架による受難(身代わりの死)と復活、およびイエシュアが王として再臨して実現される千年王国(メシア王国)における数々のことが預言され、啓示されているからです。この詩篇 22 篇全体が、神に見捨てられたイエシュアと、神のみこころを完遂するイエシュアを同時に見ることができるのです。イエシュアがこの詩篇の冒頭のことばを叫んだということは、この詩篇の全体を知って叫び、そして祈っているのです。これほどはっきりと二つに分かれている詩篇はないと思います。前半(1 節~21 節)の内容は嘆きであり、後半(22 節~31 節)の内容は賛美と感謝です。この連結部分は 21 節の後半で、「あなたは私に答えてくださった」(「アニーターニー」עֲנֵנִי)ということばが置かれています。1 節では「あなたは私をお見捨てになった」(「アザヴターニー」עֲזַבְתָּנִי)となっているのに、22 節では「あなたは私に答えてくださった」となっているのです。このことばを契機に暗闇に光が差し込み、嘆きから賛美に転換するのです。まさに「夕があり、朝があった」です。

●「暁の雌鹿」(「アツイエレット・ハツシャハル」אֵילַת הַשָּׁחַר)の調べに合わせて歌われる「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」で始まる詩篇 22 篇は、イエシュアの十字架の姿を想起させます。それは「美しい子鹿」を産むための「雌鹿の苦しみの叫び」なのです。「暁」と訳された定冠詞付きの「ハツシャハル」(אֵילַת הַשָּׁחַר)は、「メシアにある希望の夜明け」を意味しています。黄昏ではなく、夜明けをもたらすためにメシアである神のひとり子が私たちの身代わりとして神に捨てられたのです。その理由は「最初のアダム」を終結させ、「最後のアダム」(第二の人)による新しい人としての創造がもたらされるためなのです。イエシュアはゲツセマネにおいて、「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と三度、祈られて、それから敢然と十字架に向かわれました。その最大の苦しみがこの「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びだったのです。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 5 章 7~10 節

- 7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。
- 8 キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、
- 9 完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、
- 10 メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。

### (1) メシアについての修辭的表現

●この詩篇 22 篇には、メシア称号としての「私」について独自の修辭的表現があります。ここでは二つを取り上げます。

#### ① 「雌鹿」

●ひとつは「雌鹿」(「アツヤーラー」אֵילָה)という比喩です。詩篇 22 篇の表題にある「暁の雌鹿」(「アツイエレット・ハツシャハル」אֵילַת הַשָּׁחַר)という表現はこの詩篇にしかありません。神に受け入れられるきよい動物は、家畜では「牛、羊、やぎ」(レビ 1 章)。野生では「鹿」の類です(申命記 14:5)。聖書には多くの種類の「鹿」

## מתי

について記述されていますが、科目としては「ウシ科」です。いずれにしても、これらに共通する点は「反芻する」「ひづめが分かれている」こと(レビ 11 章)、そして「草食」だということです。ですから詩篇 22 篇にある「雌鹿」は神に受け入れられるきよい動物なのです。雅歌では「愛する人」のことを「雌鹿」「かもしか」「若い鹿」にたとえています(雅歌 2:7, 3:5, 8:14)。この詩篇がメシア詩篇であることを考えるならば、ここでの「雌鹿」は御父から最も愛された御子を啓示している表象と言えます。

### ②「虫けら」

●詩篇 22 篇 6 節に「私は虫けらです」(「アーノーヒー・トーラアット」אֲנֹכִי תוֹלַעַת)というフレーズがあります。とても人とは思えない人間の肩、恥辱を意味します。この姿はイザヤ書 53 章 2~3 節の「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、・・人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」の箇所を想起させます。嘲<sup>あざけ</sup>られ、罵<sup>ののし</sup>られるイエシュアの姿を十字架において見ることができます。

【新改訳 2017】詩篇 22 篇 指揮者のために。「**暁の雌鹿**」の調べにのせて。ダビデの賛歌。

- 6 しかし**私は虫けら**です。人間ではありません。人のそしりの的 民の蔑みの的 です。
- 7 私を見る者はみな私を嘲ります。口をとがらせ頭を振ります。
- 8 「【主】に身を任せよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。」
- 9 まことにあなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。
- 10 生まれる前から私はあなたにゆだねられました。母の胎内にいたときからあなたは私の神です。
- 11 どうか私から遠く離れないでください。苦しみが近くにあり助ける者がいないのです。
- 12 多くの**雄牛**が私を取り囲み バシヤンの猛者どもが私を囲みました。
- 13 彼らは私に向かって口を開けています。かみ裂く吼えたける**獅子**のように。
- 14 水のように私は注ぎ出され 骨はみな外れました。心はろうのように 私のうちで溶けました。
- 15 私の力は土器のかげらのように乾ききり 舌は上あごに貼り付いています。  
死のちりの上にあなたは私を置かれます。
- 16 **犬ども**が私を取り囲み 悪者どもの群れが私を取り巻いて私の手足にかみついたからです。
- 17 私は自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし私を見えています。
- 18 彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。
- 19 【主】よあなたは離れないでください。私の力よ 早く助けに来てください。
- 20 救い出してください。私のたましいを剣から。私のただ一つのものを**犬**の手から。
- 21 救ってください。**獅子**の口から**野牛**の角から。

### (2) メシアを取り巻く者たちの比喻

●詩篇 22 篇ではこの「雌鹿」「虫けら」ともいうべき「私」が、四つの動物によって取り囲まれています。これらの動物は「力の強いもの」の比喻として用いられています。その四つの動物とは「雄牛」「野牛」「犬」「獅子」です。「雌鹿」「虫けら」が単数であるのに対して、「獅子」(「アルイエー」אֲרִיָּה)を除いた残りの三つの動物、「雄牛」(「パーリーム」רִיָּם)、野牛」(「レーミーム」רָמִים)、「犬」(「ケラーヴィーム」כְּלָבִים)はすべて複数形です。

## メテ

### ①「雄牛」

●イスラエルの指導者たちをたとえていると考えられます。彼らはイエシュアを捕らえて、不当な裁判を行ない、群衆を先導しローマの総督ピラトを脅して十字架へと追いやりました。

### ②「野牛」

●「十字架につける」と一斉にわめき叫んだ群衆たちを指していると考えられます。

### ③「犬」

●「犬」ということばは 16 節と 20 節に出てきますが、前者は「犬ども」で複数です。後者は「犬の手」と単数です。本来、ユダヤ人が「犬」という言い方をするのは「異邦人」に対してです。そのことを考えると、複数は「ローマの兵士たち」を指し、単数は「ローマ総督ピラト」を指すと考えられます。

### ④「獅子」

●13 節には「ほえたける獅子」、21 節には「獅子の口」という表現があります。「獅子」(「アルイヤー」אַרְיֵה) は、いずれも単数で使われています。ここでの「獅子」はメシアを真似るサタンを表わす暗喩です。サタンは十字架において最大の攻撃をキリストに向けます。しかし「雌鹿」であり、「虫けら」である「私」が指し示す神の御子イエシュアを倒すことは決してできませんでした。



## 3. 「答えてくださいません」から「答えてくださいました」へ

【新改訳 2017】詩篇 22 篇 21~31 節

21 . . . . . あなたは私に答えてくださいました。

22 私はあなたの御名を兄弟たちに語り告げ 会衆の中であなたを賛美します。

23 【主】を恐れる人々よ 主を賛美せよ。ヤコブのすべての<sup>すえ</sup>裔よ 主をあがめよ。  
イスラエルのすべての<sup>すえ</sup>裔よ 主の前におののけ。

24 主は貧しい人の苦しみを<sup>さげす</sup>蔑まず いとわず御顔を彼から隠すことなく  
助けを叫び求めたとき聞いてくださった。

27 地の果てのすべての者が思い起こし 【主】に帰って来ますように。  
国々のあらゆる部族も あなたの御前にひれ伏しますように。

28 王権は【主】のもの。主は国々を統べ治めておられます。

29 地の裕福な者はみな食べてひれ伏し、ちりに下る者もみな主の御前にひざまずきます。



## מתי

自分のたましいを生かすことができない者も。

30 子孫たちは主に仕え 主のことが世代を越えて語り上げられます。

31 彼らは来て生まれてくる民に主の義を告げ知らせます。主が義を行われたからです。

●詩篇 22 篇は大きく二つの部分に分かれます。前半が「**神に見捨てられた私**」であるとすれば、後半は「**神に受け入れられた私**」と言えます。その変わり目の部分が 21 節後半の「あなたは私に**答えてくださいました**」と訳されたフレーズ「アニーターニー」(אֲנִי־תָנִיתָ)です。2 人称男性単数完了形で書かれており、預言的完了形です。それゆえに「私はあなたの御名を兄弟たちに語り上げ 会衆の中であなたを賛美します」という意志につながり、その結果として「私の兄弟たち」、すなわち、多くの会衆(教会)に御名が伝えられ、「イスラエルのすべての<sup>すえ</sup>裔」に対しても、そして地の果てにまでもその出来事の祝福が伝えられることとなります。ここには、教会の誕生が示唆され、ヤコブ(全イスラエル)の主への立ち返り、そしてそれが実現したメシア王国(千年王国)にまで、主の答えとしての祝福の射程が啓示されているのです。

#### 4. 「雌鹿」「虫けら」としての「私」が神に見捨てられるべき理由と目的

●エマオの村に向かう途上の二人の弟子に現われたイエシュアは、失望している彼らに次のように語られました。

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 25～27 節

25 そこでイエスは彼らに言われた。

「**ああ、愚かな者たち**。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。

26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」

27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

●イエシュアが聖書全体からどのように説き明かされたのかは記されていませんが、メシアの苦しみの理由と目的については、ヘブル人への手紙 2 章 9～10 節に以下のように記されています。

9 …イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

10 多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであったのです。

●詩篇 22 篇の中にある「私」で表わされているイエシュア・メシアの苦しみの叫びは、彼を通して成し遂げられる神の最終目的と結びつけて理解される必要があります。御子イエシュアが神から捨てられるという苦しみによって、古きもの(最初のアダム)を廃棄し、神が天地創造の前からあらかじめ備えられていた「最後のアダム」とその兄弟という新しいかわりを成就する、というのが神の壮大なご計画なのです。永遠に神と人とが共に一つとなって住むという「**キリストにあるエハード**」(תְּהֵאֵחָד)に、私たちの心の目がしっかりと向けられて行きますように。

2022.2.6